明日香村

「飛鳥アートヴィレッジ」2014 Archive Book

発　行　日：2015年3月

編　　集：山中 俊広（プログラム・コーディネーター／インディペンデント・キュレーター）

デ ザ イ ン：株式会社 企画・創
作品展撮影：長谷川 朋也（長谷川写真事務所）
印 刷・製 本：岡村印刷工業株式会社

発　　行：明日香村役場　〒634-0111　奈良県高市郡明日香村大字岡55
TEL 0744-54-2001（代表）　http://www.asukamura.jp

この事業は、明日香村の歴史的風土保存にご尽力頂いた、
故・寺尾勇氏の妻、寺尾栄氏からの寄付金を活用して実施しました。

日本の起源で「美」を拓く。

飛鳥アートヴィレッジ

Artist in Residence

2014 Archive Book

ごあいさつ

日本国誕生の地「明日香村」。

日本最古の都には、今もなお原風景が残り、四季あふれる豊かな自然のなかに村人が暮らし、まさに日本人の心のふるさとであります。

また、数々の石造物、高松塚・キトラ古墳の極彩色の古墳壁画など古代の文化芸術（アート）が今も存在しています。明日香村はまさしく、日本文化芸術のはじまりの地、「日本アートの原点」といえます。

戦後日本における現代アートの先駆者、国際的にも高い評価を得ている田中敦子氏も、ここ明日香村にアトリエを構えました。歴史的な重厚感と豊かな自然が織りなす、明日香村ならではの空気にその理由があるのではないでしょうか。

アーティスト・イン・レジデンス「飛鳥アートヴィレッジ」では、若手アーティストが明日香村に滞在し、歴史と自然に育まれた風土に触れるとともに、地域の人々と交流することで、明日香村に内在するアイデンティティを掘り起こす時空間を創出しています。

その時空間の中で、若手アーティストがそれぞれの手法・表現方法で明日香村の新たな魅力となりうる「次世代の美」を開拓し、そして発信していく取り組みです。今回は、新たに屋外展示とすることで、多くの方々に身近なものとしてアートに触れていただき、彼らの独創的な世界を感じていただくことができたと感じております。

明日香村は、村全域を五感で感じていただける屋根のない博物館『明日香まるごと博物館づくり』に取り組んでいます。また、「飛鳥・藤原」世界遺産登録を目指す中でも、この「飛鳥アートヴィレッジ」が大きなステップとなることを期待しております。

最後になりましたが、本プロジェクトの開催にあたり、ご指導・ご協力を賜りましたスペシャルアドバイザーの先生方をはじめ、ご参加いただきました作家の皆様、またご支援・ご協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

2015年3月

明日香村長　森川 裕一

飛鳥アートヴィレッジ 2014年度《事業概要》

■ 目 的

将来性のある若手アーティストが、明日香村に短期滞在し、そのロケーションからインスピレーションを受けることで従来の発想や枠組みにとらわれない作品を制作・発表（展示）するという一連の芸術創作活動（アーティスト・イン・レジデンス）を支援します。「飛鳥アートヴィレッジ」は、アーティストの活動により再発見される明日香村の新たな魅力・価値観を、より多くの方々へ発信することを目的にしています。

■ 実施体制

主 催：明日香村

共 催：国営飛鳥歴史公園、奈良県立万葉文化館
（一財）明日香村地域振興公社

協 力：岡村印刷工業株式会社

スペシャルアドバイザー/選考委員：絹谷 幸二（洋画家 東京藝術大学名誉教授）
建畠　哲（京都市立芸術大学学長）
烏頭尾 精（日本画家 京都教育大学名誉教授）
脇田 宗孝（陶芸家 奈良教育大学名誉教授）

プログラム・コーディネーター：山中 俊広（インディペンデント・キュレーター）

公募チラシ

展覧会チラシ

■ 実施概要

▷ 公募

募集期間：2014年8月1日（金）～10月24日（金）

募集基準：現代美術などの分野で活動する18歳以上40歳未満のアーティスト

選　　考：スペシャルアドバイザーなどによる審査を経て、
応募者の中から5名を選出

▷ アーティスト・イン・レジデンス

滞在期間：2015年1月17日（土）～1月26日（月）［10日間］

滞在場所：飛鳥寺研修会館 修徳坊

主なレジデンスプログラム：

17日……オリエンテーション

19日……明日香めぐり、エクスカーション（烏頭尾 精先生アトリエ）

20日……制作交流（村立明日香幼稚園）、
エクスカーション（脇田 宗孝先生アトリエ）

21日……国宝高松塚古墳壁画修理作業室見学

21～22日……明日香村民泊体験

23日……意見交換会（村内在住新規若手就農者）

▷ 成果発表/作品展

展覧会タイトル：「彼方（かなた）のうつわ」

会　　期：2015年3月6日（金）～3月15日（日）［10日間］

会　　場：国営飛鳥歴史公園高松塚周辺地区　芝生広場【屋外展示】

栗原 亜也子　A Y A K O　K U R I H A R A

1974　神奈川県生まれ

1999　愛知県立芸術大学 美術学部 油画科 卒業

〈主な展覧会歴〉

2006　個展「マインド・ゲームス」BankART NYK studio（神奈川）

2010　個展「マインド・ゲームス2010」BankART NYK studio（神奈川）

2011　個展「DEMADO PROJECT VOL.3/「H氏との対話」HRD Fine Art（京都）

2012　「Building a castle of sand（or breaking it）」ネクスト・ドア・ギャラリー（韓国）

2013　個展「Conversation with the Vacant Hotel」ヴェイカント・ホテル／メタスペース・メディアラボ（韓国）
「Heritage600=Tomorrow600」アラム美術館（韓国）

初めて飛鳥を訪れた時に感じた、風がふんわりと通りぬけるような不思議な印象。
目には見えないそれと無邪気に遊んでみたいと思っていたけれど、オトナになってしまった私には少々難しい。
そこで明日香村のこどもたちの力を借りることにした。
芝生に引いたマス目の上に、白と黒に塗り分けた丸太の輪切りをオセロゲームのコマにして交互に積み上げる「つみきオセロ」。
明日香村の間伐材を使ったコマをすべて積み終え、みんなで高いところにのぼってその風景を眺めた時、不思議な絵に見えた。
きっと古代のかみさまも一緒に遊んでいたのかもしれない。
埋まっているモノが日本の歴史上重要すぎるこの村では、進行形の「いま」をどう表していくのだろうか。遠い昔作られた文明とそこに次々と重なる現代文明のレイヤー、どちらも同じように大切で、「埋蔵文化の村」といわれる明日香において地上に積み上げていくビジュアルを私はくっきりと描きたかったのだ。

《 Mind Games ～明日香のかみさまとこどもたち～ 》　木材、漆喰、墨汁　［制作協力：明日香村森林組合、明日香小学校 放課後児童クラブ］

東條 陽太　Y O T A　T O J O

1988　東京都生まれ

2014　東京芸術大学 美術学部 絵画科油画専攻 卒業

現在　東京芸術大学大学院 美術研究科油画専攻
　　修士課程在籍

〈 主な展覧会歴 〉

2011　「芸大・台東・墨田観光アートプロジェクト」
　　隅田公園リバーサイドギャラリー（東京）

2014　「駄目実験」東京藝術大学内
　　Yuga Gallery、立体工房（東京）
　　「宇宙と息吹」東京藝術大学美術学部 113（東京）

明日香村では、国単位で市街地開発を止めながら、史跡をはじめ、村の生活風景もが観光開発されつつあります。滞在中も、土を盛り配管を通して歴史公園として再開発されていく様子を目の当たりにしました。景観保護地域外では、それとはまた異なった近現代社会の開発の積み重なりが広がっています。私はそれらを自分の足で確かめようとしていました。

「丘を隔てて」では、自転車に滞在中の撮影写真を貼付けて表現しました。飛鳥レンタサイクルの緑色の自転車は訪問者の乗り物です。景色の移ろいを乗せ、村の内外を行き来して運びます。村内と村外の撮影箇所で分け、二つの視点から飛鳥をみつめようと試みました。「空白を結ぶ」では、明日香村で拾った落とし物と取得した状況の写真が貼られている風船で表現しました。日常生活の中で発生したものとその記録を結ぶと、関係性がみえてきます。

滞在制作を通して、遠い時の彼方に思いを馳せがちな環境でこそ、地続きの地平に意識を向けることも大事なことではないのかと感じました。

《丘を隔てて》　自転車、ステッカー

《空白を結ぶ》　拾得物、バルーン

M I E N
N A K A O

中尾 美園

1980 大阪府生まれ

2006 京都市立芸術大学大学院
美術研究科保存修復専攻 修士課程修了

〈主な展覧会歴〉

2006 「京都市立芸術大学大学院修了制作展」
（大学院市長賞）京都市美術館（京都）

2008 「京展」（館長奨励賞、'09年須田賞・芝田記念賞）
京都市美術館（京都）
個展「One Day We'll Fly Away」ギャラリー i（京都）

2013 個展「いつかの庭」KUNST ARZT（京都）
「シェル美術賞展」国立新美術館（東京）

2014 個展「山水」ギャラリー揺（京都）

明日香村は、時間の流れを否応なく考えさせられる強烈な個性を持った土地でした。道端に置かれた意味ありげな石と横に並んだ標識、田んぼの中に点在する小さな丘。田舎道のきれいな舗装道路を走る耕運機。寺社に置かれた慰霊碑。今でも飛鳥時代の人物を拝む講があるという風習。道端で出会った方は、「村の風景が変わっていくことは良いような悪いような…わからへんなー。そんでも私の様な年を取った者は、昔が懐かしい時もあるな。」と。
作品は満開になった紅白の梅の下に、白い石ころと陶片を無数に散りばめました。陶片の一枚一枚に村の過去現在の風景を描いています。時間は線ではなく、欠片として降り積もってゆくイメージです。過去は古文書や、発掘された考古資料によって断片的に想像するしかありません。今ある風景も未来では欠片となり、最後は分別のつかない石ころのようなものになるかもしれません。未来でも梅が綺麗に咲いているといいなと思います。

《コノハノテガミ アスカ》 白玉砂利、陶片 ［陶片制作協力：野嶋 信夫］

藤井 龍　R Y O　F U J I I

1987　岡山県生まれ

2011　Royal Academy Schools（London）交換留学

2013　東京藝術大学大学院 美術研究科彫刻専攻
　　修士課程修了

2014　東京藝術大学 美術研究科先端芸術表現専攻 研究生

〈主な展覧会歴〉

2013　「KOSHIKI ART PROJECT」甑島列島（鹿児島）
　　「"A Room of Wonder" curated by Gustavo Ciriaco」
　　Tokyo Wonder Site Shibuya（東京）

2014　「Earth Art Project」ラダック地方（インド）
　　個展「ボールなしキャッチボール」Art Media Room（愛知）
　　「シャドーボクシング」旧内山下小学校（岡山）

2015　「アーツ・チャレンジ2015」愛知芸術文化センター（愛知）

久しく会っていない友人に執筆を依頼した。

—

藤井くん

ご無沙汰しております。以前会ったのは一年前でしょうか？ 展覧会を観ていないのに急に文章を頼まれて困惑しています…。とりあえず考えてみます。「におい石」の写真を見て、父の目を思い出しました。僕の父は奈良出身です。僕の名前 "飛鳥" は、奈良の飛鳥地方からつけられました。子供が生まれてすぐに千葉へ移り住み、これまで30年近くここで暮らしています。父はどこか遠くを見つめていることがよくありました。口数の少ない人でしたので、何を考えているのかわかりません。父のその遠い目の先に、僕はまだ見たことのない景色を思い描きました。とりとめのない話になってしまいました。また会いましょう。近くに美味しいベトナム料理店を見つけました。

—

遠い先のことを考えたい。時間的、空間的な距離だけでなく、精神的に遠い物事について。これから起きることも、もうすでに起こったことも。

《におい石》　石　［制作協力：打谷石材株式会社］

《ジンジャーフィールド》　生姜、地面、旗

《Like A Stone》　ラジコン、擬石

TAKASHI
HORIUCHI

堀内 崇志

1991 北海道生まれ

2014 日本大学 芸術学部 美術学科彫刻コース 卒業

現在 東京芸術大学大学院 美術研究科彫刻専攻
修士課程在籍

〈 主な展覧会歴 〉

2013 「ボブ&ウィーダ」YUGA Gallery & 立体工房(東京)
「ジェロニモ」TURNER GALLERY(東京)

2014 「新春・現代の絵馬展」東邦画廊(東京)
「Art Exhibition Zero-K Vol.6」スペースゼロ(東京)
「新・収蔵品展」佐久市立近代美術館(長野)

この作品は、不確定な要素を取り込む事が大切でした。全体の形は古墳壁画修復施設を見たときにこの形をフレームとして借り、ミニマルなものにしようと考えました。普通フレームは何かを入れるものですが、これは「彫刻のネガ」つまり型、と一体になっています。その理由は古墳内の壁画に由来していて、壁面と壁画は技術的に可能であっても、引き剥がすことはできないところに着目したためです。不安定な素材を用いたことは、古墳内に人間を保存し続けるのではなく、人間が流動的に失われ続けることによって、逆説的に人間の存在が強調されると考えたからです。飛鳥にちなんで鳥がお米を食べに来るといいなぁと考えていましたが、それは不確定な要素の一例でしかなく、雨で流されたり誰かに持って行かれたりしても企画は成功でした。この作品は鳥自体を見るものではありません。野鳥が米をついばむ様子が見たかった人は、自分の家の前に米を撒いて下さい。

《Stone Cold Crazy》 セメント、木材、米

「現代の飛鳥」を浮き彫りにすること

山中 俊広（2014年度 プログラム・コーディネーター／インディペンデント・キュレーター）

3年目を終えた「飛鳥アートヴィレッジ」。近年全国的に広がりを見せる「地域型アートプロジェクト」と呼ばれる、アートを地域振興にリンクさせるこのシステムを、ここ明日香村で実践することの意義と成果が、昨年から一歩前進したかたちで目の当たりにできたことは幸いでした。それらは、この土地に通底する飛鳥のアイデンティティの解釈の深化です。

私が初めてこのプログラムに関わった昨年度、当時の参加アーティストがレジデンスを通じて作品展で提示したものは、飛鳥時代の「飛鳥」と、現代の明日香村としての「飛鳥」、これら二つの概念の不一致でした。現代の飛鳥は、観光地としての整備が随所に進められ、私たちが現地で目の当たりにする風景の中に、古代の飛鳥の面影が直接的に反映されているものはほとんど見られません。その違和感を、冷淡なまなざしで作品表現に落とし込んだことが、昨年度のプログラムの一貫した特徴でありました。

そんな昨年度を踏まえ、今年度はこれまでの飛鳥の歴史と現状の大きな枠組みをさらに把握して、過去と現在が結びついた飛鳥のイメージを許容できたように思います。レジデンスでは村民と交流するプログラムが増え、作品展の会場が現代に造営された高松塚公園の芝生広場になり、さらには全国のニュースでも大きく取り上げられた小山田遺跡の現地説明会が偶然にもレジデンス期間中に重なったことも、大きな要因だったと思います。これまでの飛鳥の歴史を、断片的な「点」ではなく「蓄積」というイメージで今年度の5名のアーティストが認識し、その思考のプロセスから作品展のタイトル「彼方（かなた）の器」のイメージへと至ったように感じます。飛鳥の本来のアイデンティティとは、飛鳥時代の「古代」ではなく、むしろ「里山」の価値観にあるのではないでしょうか。いつの時代も、第一に守られてきたものは人間の営みであり、自然や過去の遺産に一定の手を加えながら時代に合わせて変化させてきたはずです。最低限守られるべき遺跡と自然のみが残され、それ以外の要素は生活のために解体・開拓されていく。その上に生活の基盤や環境を積み重ねてきた飛鳥の時の経過に気づき、作品展にてそれを表現できたことが、今年度の大きな成果と言えるでしょう。

この地域型アートプロジェクトのシステムで実施される企画においては、アートの表現を通じて生まれたものを地域へ還元することのみならず、アートそのものとしても本流の一定の評価軸で認められる作品を制作・発表する義務があると考えます。具体的な効果のみでアートが評価されがちなシステムの中で、芸術性を担保した上でこの場での存在意義を見い出すならば、それは飛鳥の本質への「思考／想像」を誘導させることだと思います。ここ明日香村を、「日本の起源」と形容する理由にも関わってくると思います。日本の歴史上で、政治と権力の複雑な構図が国内で初めて現れたのが飛鳥時代であることからも、一定の論理性が社会として求められた最初の時代とも言えるのではないでしょうか。そもそも歴史とは、現代に残された限られた数の事実の証拠を、現代人の思考と想像でその隙間をつなげ、埋めていくことで、理に適った論理を確保して作り上げていくものであるはずです。現代の豊かさや古代への憧憬などを断片的に語るのではなく、浮き沈みのあった過去の時代も含めて現代まで通底した物語を語っていくことが、この飛鳥の地に相応しいアートの関わり方だと思います。アートそのものはそれらを直接的に証明することはできませんが、その気づきの機会を作ることは可能です。

地元村民との交流の機会を前回よりも多く設けたレジデンスプログラムに続いて、作品展も観光客や地元村民が散策に訪れやすい場所で開催して、一般層が広くアートに親しみを持つことのできる環境を重視しての今年度の実施となりました。レジデンスと展示の現場に関わった人々の反応は比較的良好だったものの、一方で屋外展示による課題は多く残りました。屋内から屋外へと展示会場が変わったことによるアーティストの作品制作の負担増と、それに見合った金銭面と時間面での支援不足。また屋外展示のノウハウが少なかったことによる、会期中の作品劣化や管理の問題。季節の変わり目の開催で天候に恵まれない日が会期中多かったために、問題点がより明確に露呈した結果となりました。そんな状況を事前に予測した上での、各アーティストの作品プランへの的確な助言や変更の指示の細やかな対処には、私も自らの力不足も痛感しました。

歴史の要素が強い地域で開催するものだからこそ、その歴史をただ回顧に留めることなく、現代から未来までへも結びつける視点を見い出す場を、この「飛鳥アートヴィレッジ」が担うべきだと考えます。ただ一地域の問題に留まらない、日本全体に共有した価値観が掘り起こされる可能性が十分に秘められています。その可能性を、村外からやってきたアーティストのみが浮き彫りにするのではなく、今年度の実績以上に地元明日香村の人々と現場の共有をプロセスと共に深めることによって、双方にとって新たな価値観の発見と活動の潤滑油になっていくことでしょう。それこそが、「飛鳥アートヴィレッジ」が創出しうる理想的なバランスだと信じています。